

# 教育委員会・学校との協働による 実践的な指導力のある教員養成の在り方に関する研究

A study on teacher training aimed at fostering competence in educational leadership by collaboration with the board of education ,the school

中村 正宏（教育学部附属教育実践総合センター・教授）

Masahiro NAKAMURA（Professor, Integrated Center for Clinical and Educational Practice）

椋田 容世（教育学部附属教育実践総合センター・准教授）

Hiroyo MUKUTA（Associate Professor, Integrated Center for Clinical and Educational Practice）

## 1 研究のねらい

本研究は、実践的な指導力のある教員養成の在り方を明らかにしていくことを目的としており、調査研究と実践研究とによって構成されている。前者では、若手教師の現状と大学教育の在り方に関する情報を収集し、大学での教員養成の成果と課題を明らかにすること、後者では、授業や学級づくりなどを体験的に学ぶとともに、教師に求められる人間関係調整能力やコミュニケーション能力などを育成することを目的とした「学校フィールド・スタディ」の取組における成果と課題を明らかにすることをねらいとしている。

## 2 研究の方法と内容

### (1) 調査研究 「3年次・4年次の教員を対象とした面接調査と質問紙調査」

対象は、平成15年度または16年度の本学部卒業生（大学院修了生）で、教員採用試験にストレートで合格し、次年度より県内の小・中学校に勤務している3年次または4年次の教員で調査に協力してくれた31名。5市教育委員会の協力のもとに、市立教育研究所などの会議室をお借りして4～5人のグループディスカッション形式によるインタビュー調査と質問紙調査を計8回実施した。1グループあたりの時間は90分程度、時間帯は勤務終了後の午後6時以降とした。実施時期は平成19年11月～平成20年1月。調査内容は以下の通りである。

◆面接調査 現状と今後の課題に関する項目として、(1)子どもとの関係づくりについて（授業や学級づくり、個別対応など、子どもとの関係全般において）①教師として成長したところ、工夫しているところ②苦勞しているところ、今後、伸ばしたいところ (2)保護者との関係づくりについて（①教師として成長したところ、工夫しているところ②苦勞しているところ、今後、伸ばしたいところ）の4項目を設定し、(3)教師に必要な資質に関する項目として、①学生時代に学んでおいてよかったこと ②学んでおけばよかったことの2項目を設定した。

◆質問紙調査 ①「メンタルヘルスに関する質問紙調査」②「教師のためのストレス・セルフチェック表」③「日本大学医学部公衆衛生学教室式ストレスチェック表」④「NIMH原版準拠/CES-D Scaleうつ病（抑うつ状態）/自己評価尺度」によるメンタルヘルス調査を行った。

### (2) 実践研究 「参加的・実践的授業科目『学校フィールド・スタディ』の取組」

「学校フィールド・スタディ」は、平成19年度からスタートした、学校や幼稚園の教育活動を体験的に学ぶ教育学部の実践的な授業である。2年生から4年生までを対象として、「10日以上、かつ、30時間以上の活動」により1単位が認定される。活動内容は、①授業などの教育活動の補助 ②特別な教育支援を必要とする児童生徒の補助 ③放課後における学習相談 ④実験や実習、実技指導の補助などであり、活動先は、県内全域の幼稚園や小・中学校である。

以下、その取組の概要の流れに沿って示す。

- ア 「学校フィールド・スタディに関する意向調査」の実施 ……平成18年度後期  
県内61市町村410の幼稚園や小・中学校から学生の派遣希望があった。
- イ 「学校フィールド・スタディ受講説明会」(200人超の学生参加) ……4月13日(金)  
・開設のねらい ・履修の流れ ・さいたま市アシスタントティーチャーの体験発表
- ウ 「学校フィールド・スタディ 事前授業」(150人程の学生参加) ……5月11日(金)  
・意義と今後の進め方 ・活動の留意点 ・特別な教育支援を必要とする児童生徒への  
対応 ・実践的な学校体験から学ぶ
- エ 「中間授業」の実施(約140人受講) ……10月19日(金)  
・全体活動と縦割り10のグループワーク(①配置校で行った活動 ②ぶつかった困難  
と克服方法 ③教師の活動について学んだこと・考えたこと)
- オ 活動先の学校訪問 ……11月～3月  
・学生の活動状況の把握 ・実施上の問題点や課題の把握
- カ 「ふり返し授業」の実施(約100人受講) ……2月1日(金)  
・全体活動と縦割り20のグループワーク(①配置校で行った活動 ②こんな働きか  
けが子どもを変えた ③幼児、小・中学生の指導のこつ)

### 3 研究の成果と課題

#### (1) 調査研究

面接調査から、学部教育においてより多くの学校体験が必要であり、また実践的な授業が有効であること、道徳、生活科などの具体的な授業の在り方や学級づくりについての学びの必要性、学生時代に様々なアルバイトや遊び、旅行など多様で豊富な体験をしておくことの意義などが明らかとなった。また若手教師は、昨年度の調査対象であった新任教師と比較して、精神的安定力や客観的洞察力、子どもや保護者、同僚との信頼関係の構築に必要なコミュニケーション能力や対人関係能力が大きく上回っている傾向がうかがわれた。質問紙調査からは、若手教師のストレス値や抑うつ傾向の値は新任教師よりも高いが、ストレスコントロール評価やストレス対処能力は「良好」であり、新任教師よりもストレス耐性が上昇している可能性が示唆された。

児童・生徒や保護者、同僚との関係づくりに必要な共感能力やコミュニケーション能力の向上、教職業務のストレスに耐え得るためのストレス耐性の強化、より実践的な体験の充実化を目指した、学部教育における有効な教育プログラムの開発が今後の研究課題である。

#### (2) 実践研究

学校フィールド・スタディで活動した計203人の学生は、身近な市町村での多様な学校体験による学校や教師の仕事の魅力や内容、子どもたちへのかかわり方、様々な課題などを多面的に理解できた。また、中間授業やふり返し授業により、学年や学校種を越えた体験の交流ができ、教師として必要な資質や能力の向上が図られ、教師になるための各自の課題が明らかになった。さらに、学校フィールドスタディの取組を通して、大学と県及び市町村教育委員会、幼稚園、小・中学校等との連携・協働による「力量ある質の高い教員養成」の体制が少しずつ整いつつある。

今後の課題は、①派遣を希望している多くの市町村に学生を派遣できるよう、履修生をさらに拡大すること、②活動先の学校からのニーズが多い「特別な教育支援を必要とする児童生徒」に関する理解を進める学習の場を設定すること、③高等学校や特別支援学校の教員を目指す学生の活動先として、県立高等学校や県立特別支援学校での体験の機会の拡大を進めることなどである。